



呉巡検調査を振り返って その五

平井, 晶子

(Citation)

海港都市研究, 18:88-89

(Issue Date)

2023-03-27

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482810>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482810>



呉巡検調査を振り返って その五

平井晶子

はじめて呉。大和ミュージアムと映画（漫画）「この世の片隅に」の影響で観光客が増えているということにまず驚いた。次いで、広島ของそばの港（軍港）という程度の認識しかなかったため、独自の景観・町のたたずまいが広がっていることにも驚いた。

ヨーロッパに行くと国立の軍事博物館が目につく。はじめてそれらの存在を知ったときは不思議な感覚に陥ったものだ。軍事博物館というものがあることに驚き、どのようなものか興味津々であった。覗いてみると、想像以上に戦車や戦闘機などの＜もの＞が展示されていて驚いた。戦闘機の来歴がわかるように古いものから並べられていた。＜もの＞以外では、有名な場面（町や参謀本部など）が再現されていたり、写真が展示されていたりした。つまり技術的な歴史がわかるものから、戦時中の暮らしがわかるものまで幅広い。ただし基本的には「誇らしい」展示である。

そのためこんなのは日本では難しいだろうな、こっちではどういう経緯で、いつからあるんだろうと漠然と感じたが、この記憶はながらく眠っていた。

今回、はじめて大和ミュージアムに行き、基本路線は海外の軍事博物館と同じかなと思った。時間がなかったため、展示の詳細を見ることができなかったが、おおよそ＜もの＞を、技術的な観点からながめるような展示になっているように感じた。ただ、国立博物館ではなく「呉市立」である点が独特といえば独特であろう。軍港＝呉＝大和という特殊性を打ち出すことで、いわゆる「軍事博物館」と銘打たない立ち位置を見いだしたのかもしれない。

呉はもちろん現在も軍港であり、自衛隊の基地がある。港にいけば戦艦もある。またそのすぐ横に「通常」の航路があり、愛媛や広島との往来が可能だ。観光船というわけでもなく、1時間に2本ほど「在来船」が運行している。神戸で「物流の港」しか知らない私には、日常の足と軍艦が小さな港に共存している絵はまったく新しかった。

呉から船で広島に移動し、港から広島中心部へと路面電車で移動した。広島ของ市街地が

思いのほか内陸にあること、他方、港は内陸とは別に呉や愛媛と航路でつながった生活圏があることが想像できた。現代では航路の役割は小さくなっているかもしれないが、かつては航路を通して人やものが移動し、つながっていたことが容易に思い浮かぶ。

巡検ではただ「巡れ」ばいいわけではない。いかに巡るかが問われる。今回の航路による移動であらためて巡り方の重みに気づかされた。